明星抄

早蕨宿木

八

濵田氏藏書

早蕨

此巻以歌并詞号之 詞にわらびと
ありまた歌にも薫大将総角(アゲマキ)の次(ツギ)年
の春也

やぶしわかねば　日の光やぶしわかねばいそのかみ
ふりにし里に花も咲にけり
中君の心中やまことに宇治の光なれど
年頃姉君に別て今日の春をしらず清きを
色もしらず見しよりも心うきことなれど
もとめきとして　哥もしのびすべし
上句をたゝるしゆへにかく下句を続けたるの句

九曜文庫
青谿書屋

まれと上句をはぶきなすぞこゝぬがひは見分
志ものひしるべし何事をも云あらせ給を
いへるまゝ
心ひとりをくるゝ給ふ　又いひあはせん人なる
身となり
文の相りしゆきとも　八文也
世よとゆるへき　世間の世常紙出りぬ
も死をべく相りへとも心はけれど又大事は
情むよもかひなしとなり
年あらはぬ中なりて　文の大涯（タイガイ）詞也
ていはとあしく　手紙也

ひきはなりて　大略文は書さしぞる事
そこゝきはれ紙分ん世ぞ朝は書はぐれ
なる紙元ゝ事を引敬（ハチチ）ゝ事のとゝぬ
しかれ世ゝ書法師のさゝ相りしを
君よとて　古八文の所時の和例（カレイ）を忘れざる
となり
大多（ダイジ）　中君の心ゝ御（アジヤ）罵（ハリ）は事を一大事
とおくしう業し給ひはしめとなり
相さりはさしもおほさぬ　自文の所文より
そこゝもとゆるとゝ
はまゝ　はまゝの名なり八文大事なるとも

やこはあやまる紀　此二人乃ま御ひとこはを
せよゝゆめしあらかくらまる　蕙大夫ハ
宮人ゆゑ紀ゆゑを張り給ふ
おつまあらきに　旬の御心まつひ
さつまなるゝ　鞆（ウタガヒ）給ふ　ゆゑ
あへしらひ給ふ
なきかし貴心の中も　旬文の蕙の心とも
よく推（ヲシ）ちつまての給ふ
文もうの人ちく　旬文中宮紙京へ渡せ
爲さ御の給ふ
いとうまし貴　蕙乃よ給ひ給ふ

あひなくこゝ行ふ乃　蕙ハ蝶（バイ）妖（カイ）せしるす
なまにいへぱ大夫も蕙乃あやまちの爲ふ
ゆひ給しるす
りしひなく　旬文の鞆給ふ
うのことんと　大夫の御づら給ひしるす
いはせ乃りまの　花鳥乃紙一葉
[illegible]しくいさそもみよりしんづてよいはせ
りまのよふこどりも人ばくまるで遅（アヒ）
しるすのよこしとこぞまぞ爲ぞてはあ給
ゆりじ貴と云爲さをぞまをばいひのこし
給ふとこ

山乃内よりハ　暮乃山の内祥携之
さてもおりし侍らん　暮乃頭持給ぞ誰かれ
とかく
うしこ世も　守旅乃家之
ぼうしミ絵　中菊のゐ之
いさミ家りよ古世ハ縁士なんとをぶりてや彼ミの里
乃おさまりくもおりし乃ゐりて書つまハ絵
家りて絵もハ笛ミさとし松ておののかまよ
もふる乃山里いりすゐんかく守旅の里
をふる乃山りよ志すして書つめとぢ家もしふ
ミ絵守旅りよ志るして上めりし揉乃傍々

里よハ雅もて書ざ侍祥携之
さりとても　中菊乃ゐ家之
浅かりぬ中の花かりも　かく笛ぶりまて首
乃世ひ給るすもゐこぐりよ乃ミおりぬへ
きりしとののみて
花乃本にても　庵の梢(コズヱ)之
ミ祢乃霧の　表霧さ川と見ん揺て分路ハ
乃家りて書ら悲(エツ)路(カイ)古身をも旅人(アリ)比(ヒ)し
ていへまぢすみて表旅とゐミ絵ぢもて
守旅乃山里りそのゐりまま」ハ岩(ミネ)の旅と
書給而円し

をのことこよりて　とこよとハ夜ハをいへつま
沈丁乃まさにはんこさら中ニ君ハ歌ゆく
生(ウミ)給ひしハ人なまじどりゆくより乃ゑなて
夜まさくあらぬ所に海つま給紙云や
沈ふくも　大君十一月にうせ給へつま九十日乃
服(ブク)なまして二月にあぎ給へつま
みそこさもあさ兄　中ニ君乃ゑにあらぎて志給之
おや一所　母上をはこ給ハざるなり之姫君を
母乃ごとくに志給ふるなり之
沈車こせん　沈稜(ハラヘ)に沈系に出給りん用ゑこ之
まちせ　女にも海りつま乃為(タメ)太ニ九年どそふる

なりあるとこ之出来たりけハ陰陽(ヲン)拙(ヤウ)士(バカセ)なる
なる無こさ歌沈たちへ乃ゑぬめ沈ぜんりそ
へく陰陽師をこそさつらきこるへし
まちりしや　一説中ニ君乃家ゑこめ兄ハ薫
乃家にまくて歌今日乃中ニ君の沈稜を志ひ
御りて大君乃なりを昨日今日と志ひし
ようや中ニ君乃陳(ヂヨ)振(フク)にも成けつよと之
ゑまに文く　げにとハ家を請(ウケ)こく兄ゑ乃
地に書沈之
沈まこり乃　家へ出給べ身料(レウ)之家にて人々
にもしぬさりるへ身物之

おのまよ濡まそてハ　蕙乃念仏よ心を運(ハコ)び給
ふぞ
かく給ふを　ねまごさいりせ給ふるをと云ま
まつりハ浮ら給りん　蕙字浪へ浮ら給ふ
名ハ二月六日ゟ中宗ゟ七日よ京よ浮ら
給へつま瀬(ゴヒ)乞よ浮ら給へおまするべし
まらうと井　客亭(キヤクテイ)え
今ハやうく　大宗札ちせがとく
参りう　大宗紙ちん京へう引せべしと云ひ
しりめをとく
さきにハ　鮮よ大御うよひて執とく

ひまのさせし　椎弁(シイガモト)よわらけし
ぬまきもんく　大宗乃名をおひ出るく
おきと乃浮らを　浮よよせく云つまぞ京へ出
給ふ画さるゝく
月は乃津りう　蕙人綺(ヅテ)よの給親え
おぬせ　外様むきさするとく
ちらぬるしと　中宗乃無るさ宮よさ
しちるりとわれをハざましともとく
いとちうしまに　蕙乃さ渡く
両親さらぬ　大宗乃おし渡さバ給へおくひ
給ふへ参ねをとぞ蕙をもりぬ給と出おのく

里を出るゝと云義あまども不用之
なりしまに　薫乃どんし給ふ之
雑ふまし　中君をむかし乃かゝることハ出て
ようあるに只今新へ出給ひ本紙根(ネ)なが
ら(ウツ)稙しゐるゝ如しと之　根こゝめし
ゐゝゐ洞紙　薫乃さゝ海之
かゝちもりへくまる　弁(ベン)乃尼(アマ)又髮(ヤミ)をれ
給しなてゐるゝ
めし出く　薫乃めし出し給ふ之
こゝりハ　薫朔之
いとゝまなりて　命乃給つまゝゐるゝ之

打まてさせ給ひ　大君乃事家を推給之
はゝもいかに　かやう乃ゐるをゝはゞけまる
なかゝと之
ひさひ乃程　さげ尼乃時よさゝ海かりうる之
ゝひ繼く　大君紙意しく出給よりまて
さゝ海く乃事をゝ出給へなかゝ(カタチ)能をもうへさ
せまてりまを(トゴム)留なかるをもありゐへさゝ物を
とゝ出給之
まにむまをよ　弁がさゝ海之
さ紙よゝ川　人よをくまゐとハ心乃まゝな
らハ大君よをくなかまりしきとゝ

そまにもいと　変を法文にはなして弁をはなぐ
さめ給へ
うの花にいつかるす　入(ジ)あ(スイ)など紙してハ紙乃
制戒(セイカイ)にもぬがひ行きにて彼(ヒ)花(ガン)に至(イタ)るす
うくかるへしとこ
なへくむなしく　読(シヨ)ず見(ミ)くしへ歌とこ
身をなきん　人をいかく数(ケウ)化(ケ)し給へとも
あ身をなぐさめかゝ紙とこ
まてもなき紙　世(ク)絶(リモ)世(キ)絶(メモ)
人乃とかゝる　自然乃不紙志給へ
おもかし　中恵乃法華にて諸

いよしやけして　弁之
人はこゝか　袖乃浦にて出(デ)雅(ハ)之　新古今
なが井きる海士乃志をさぶ紙月ゝつゝに
袖乃浦にもあ川洞小君長井うゝ紙
し歌となり永禄(エイロク)元年十一月八日法説
雅楊之
志ほゝるす　中恵乃宗へどとなきやとハと
なしさどこ尼恵の袖にもをさしさどとこ
うきもある波とハ歌へよりあるす
心かゝ浮(ウキ)ゝる船に紫(ノリ)杓(ソメ)てひとひも波に
ぬきぬ目ぞなる紙乃宗よく叶へつき

ぬしおもはやと　薫宮浪志ひ居り給へ里
花鳥にひかまさる浅芽(アサヂ)原の方に用之
こゝろは　二条院之
まいの乃いかにそや　れかへまもかるや乃心
左出給ひて　中君乃浪事人薫乃来りかへら
荷乃心志まさる　宮浪にて別しんなるへし
あさゆふ乃　薫乃親之
おまへ乃捐也　中君乃事ならぬ面ぞてがま
しきとなり
まにれりせまりしかハ　中君乃心之大君乃れ
をせしかハとへ

ちかゆいろ鳥乃巻　前にもはし親乃面がけ
あり深く大君をも志給ふ
いとゝ浪さりまさる　かく世にも出給ふ屋う
なるにはまさくハ一入志出給ふ
人くも　おまへ乃人くへ
人はくなるに　志ひやまとしひ給ふ
なとうむまは　自父乃親之
へうなるに　中君乃心之
う乃人也　薫之

十三終

宿木

まこの君以寄早せ之慧たこよりたに又乃
巣とこ二ヶ年乃事あり然ハ早蕨まこ
よりまこ前乃るゝ之推なり乃来より総角
早蕨乃るゝもありまこり来まくゝ君こゝら
熟して前乃るゝを云出せるゝ玉鬘乃
まこも玉鬘乃君に巣乃年よりのこ
と紙書て来ゝて源氏乃たゝの年に当
なるやぱまこも友蘆 女二宮 るゝをいたんとく
前よりの事を書なるゝ之也和治乃例や
其は友蘆 左大臣乃こゝ君之簾(レイ)家(ケイ)屋(デン)に号

せらめんや中宮よりも早く春らさへつま

左大臣家　此左大臣なる兄系(ケイヅ)図はり

梅うらん乃左大臣とおら擢(アキサリ)之於世ニよ

まとの葉乃上達乃左大臣りまくある人

や今上乃左大臣之

おさま女と　まくしらむきとめとまれ

ゆかるえ

中宮よりて　明石乃中宮之

この女　女二宮之

又杖とく　又左大臣之

ゆへつまし　女院之

十宮よまら　女二宮之

さりしそつし

女院地乃宮　稚ヤ乃女之薫物さくここに

宮仙へ於孫ハ附なる之

宮ハ中のそ　女二宮之

従(ナナヌカ)十九日

おらまとと為り　男之

おくらやのむらのを　随左大臣乃愚(ミ)夜

童乃兄弟之むらの女ハ浴(シユ)理(リ)大夫之

うりのひなそて　うりのひなそむしそえ

梅ちりよ女乃さしさまうめのみ之

朱雀院の姫宮　女三宮の例をもひ給へつゝ
いてやめかりてもあるか　宮なりけるかなりけ
うしろこなくこともとあり志かどと今志へなぐう
ほるを女三宮もりら給ひてこゝろ打ぼえ
も聞ひるすなくまし御せとゝ
やうてもほゐて　女三宮の例にとゝ
りとよりまゐ志ゆん　志ゆんあつまとも女三宮な
ど紙を給ふに志ゝてさつるまゝ身ゐなく
なりと葉の性（シヤウ）を作給ひ給ふこゝろ
ほゐにハ　中葉作くまゝでハ叶まし身とゝ
夕霧の六葉なるものなるへし

中つかさの君に　中務の親王ハ今上作子
なり上聖の親王ハ西代の親王に非ず
今日の志くまし　勅浪（チヨクゴ）の面白き作ゝ
あそひなりとさまし身　友臺りて志
るゝ二宮作振（ブク）の管絃（クハンゲン）ハいかゝとゝ
よ紀のりれハ　かけ物の賭の字賭（ノリユミ）なりと云ゝ
女三宮の作るすをかの物しゝ給へかゝ
打りて　下度して菊を打るゝ
よの御母の　雲の上の笆（マガキ）をもちゞうらるゝ
雲よりあへなど　女三宮なり母女作もなくてさ
しゐさとよりそへ給へつゝ

まいの心のくせ　薫の心のくせ
いてやゆいにまも　女ちかもなかさに能きとこ
宇治の大君の中君にゆづり給ふ也
ゐしてあまたれ
作云
ひしまよりのくせにうへつま　世紙ひじつま
さるんの世に御さるのこんぴしつませといへ
なか面白し　私云一本ひしりやうの物のとあり元も真あり
ことさらに　人をうくいあらざるとこ
きさ死から　同くかとこ
右大臣殿　右中将右大臣元も世を御殿
組於右大臣之三　四辺代本皆右に改之。

花鳥天義王義ハ及無からさるや
夕霧ハ右大臣なるゆゑ明の事
あるゆゑしく　そぞ貝紙もせざる人を
とおほせとおふ屋うなる事をたし。
さるまとそ中蔵なをたひ元むへ男に
そ能きと於さらにもあらハ其ゆゑ
とおほせこ
中宮をも　夕霧明石中宮をもうらみ
給ふ
いとおしくかく　明石中宮自宮紙数列給ふ
うへの御世も　其宮にりかくおほせこ

二条院　中宮の
にはたちにかはり　は程我がきもなりしは
とし
つゐにか山住は　其後山里は住果(スミハテ)安とし
草のりと　春の御ありを云ひて桐壺まで
は此朝所ゐて
御しやうれる　心の不動(ル)
もし世はおはせまりしかは　大君の為ゐ薫
の心も深くなりけれ
なれ所をきとも　八宮大君紙云ひて
行かはひなれ　自宮へはしひあるまし者
もはせなりさるとし
つ孫よりも我は　ことうこの為ゐ出来べ
かれはなりしかはひ給ふ
きいなりぬさ波　猿姫の為ゐ
八月は姫ぬきは　六君の事や
宮は無こそんと　自宮は云出し難く志ゐ
なりて
思ひこるゐりは　日下草の地をしは
うまていへて
うく海り給はし波　中君の海ゐ給ひて
波は一日も我がきもなりはし給とし

このごろ時々　なりつきん乃文の作ん
こゝつゝさまのこ　中君乃ん
女まも　夕霧乃あたら乃るゝ
あいなしや　葉乃ほうぐ抱まして中君を
こゝまりうがかやしの抱ひてなりるゝ
身抱をとゝ
むかし乃人は　大君はゝ
めこしく　女ごこしくゝ
みてありさ　自文は緑妙申せし事ゝ
きおり乃事　き時乃事ゝ今ハの給
ひ出る事もなしとゝ

給あてなるゝこは　朋友（ホウユウ）乃変（ヒジハリ）ゝを作く
まべ身るすとゝおしざ海乃作ゝもち升
とゝ浮舟乃事なども然爲りさるゝ
之女のゝりちゐ乃ゝなりし一切（サイ）人乃をゝ
ゐるゝ身るゝ
うの人　大君や
此君を　中君を大君乃ゆるまとゝ心へだ心
ひなるまうこしとゝ
と海ゝんんを　総角乃まゝはあり
なをのまさひは　葉乃ゝ
さるゝ乃君はまの　女三文乃作まはあれ

人をまえば宮ぬ君の恵をまとしたまへ
孫ヨロ王なりとも思ひ
あらるさ所さて
撫ぬ君なる死花の交なるまや物るさ
さ死ぬ物ひよまるを
かくしもあきなるら　秋ふけくしまる次
弟くは物行さ海え
きこの院は　二条院中恵の御ぬるを
三条院よりまゐれよあらまし
交のきのふよりを　旬交所爲ありてとゆし
交めさても　天然の容義（ヨウギ）え好交の人は

ゑ所ざるとえ
物ゆを引よせて　撫のうづらのあるさ海え
筆さのまの　うくはうれくさえやまれ
抱とえるくも形めでつ爲てさとえ大恵の
事をいへつを
をえるへしをか　好交の事はゆへも海
らさるとえ
物はるるくまゐに　秋の物るはしてがひて
霧（キリ）の深く見ゆるさ海面白し
物はしれまゐてさにまら　不及引ゆ二ま
物をえだうるを

女房の泣きかひ　泣掻子もさいりさるへし
　女房の泣けちひもみえさるとこ
おりまて　えよりも下車し給へ
女の　自女の泣惑りとしふとこ
こまにさふらへと　薫の詞へ
さらかいりか　門の女房を遣の詞へ
さらおりて　薫の詞うちにさふらぬ無し
とこぶる人なとこか薫の自早下しく
の給へ
そまにまさらぬ泣心なまこか　泣心さし
てうらこゆ無きうもなしとこ

おしく　男くしさこ
うそ泣ましうまし　中君の心に泣
ましさもさこしうすらぐとこ
泣ようもしめり　六君のうをしひまへ
なかなるへし
こまやかに　薫のよくをしへなりしまへ
　謀の兄弟のごとしとこ
色なともりとさと給へまて　大君によく
給ひあり
人くしく　薫の詞
心うらかし貴なる　出し貴なるとこか大君

乃事ぐやし先るすとは中君紙書物は
せざるるすと
ありきりて行　撰者云つま
よそへてそ　婦君はよそへてこんとよそ
給へつま
露を花とさて　菫乃重(ニシ)遊(タイ)乃志げかな
かをいへつま熊ちすらぎて露も玉給あ
ましとし
を花なからし　露は玉ながらとし
きえぬさに　下句は中君乃自称や
行ようきる　はまるなきは行ようきる

そとし花鳥乃引ちの名所也
秋乃そらは　薫宮給へ行給へなるすを
浪り給へつま　飛(テ)中(ニ)腸(ハラワタ)断(タツハ)元(レ)秋天乃名也
古院乃うせ給ひて後　は宮浪乃文のあき
あるをかんぐ昔乃ことも紙志出しうると
て浪給へつま
さう乃流　花鳥ゝかんぐうは大笑ふ乃す
淳(ニシ)和(ワ)太后正子義久して大笑ると号し
給へつま　さく花鳥清和太后とす後(ニ)一寄
淳和とし
う乃流あらり　六条流也

ますまさ草　悲備（ニウ）をしまするに程を無くて
しらず夕夢もうけいま程給へとゝ
うのいふしへの出しさ　六条院の世紙さら
給ひしるすゝぞ折は薫も未幼なるわし
とゝ
ちうさ美　大君なるすゝ
むかしの人を　大君なるすゝ
ましてあれも　中君の心
世の事よりハ　中君にて山里にて折ひ
ちと給へまゝが世の事（ウキ）なるすゝは出らせ給はざれ
れぞひくらふへ当るすも当紀を思ひとゝ

世なるに程給へれぞ今ことうはよの事なれば
ひくらべて山里は海の安心の出来ぬるゝ
山里は他のさひし当るすこうあまさ世まれ
うきこうさ程よりまり
は此日あまり　父文の月三年ゝ四年と
こゝる義あり不用之字給へ行ておとる
はぞやとゝ
志のひくまさらせ　中君の羽ゝ
あらさしとおほしとも　薫の羽字給
の文のるすゝ
ゐうしと紀　皮文紙半に下ゆとゝ

こゝろへも　中君右文乃忌(キ)日の作(サ)善(ゼン)を
させ給へ
あるゆかし貴る事　薫乃詞
いつこ無くも　宇治にてもうく和尚ぞ
てゐる射面なるましるなる
さふらひのへたり　侍乃判当右京大夫と
あつま諸大夫なるへし
和へまゐて　うく用意申て出給へ
拾はせかひ　中君乃泣きひ
そ乃ゆく　大君乃後薫をいまゝぐ精舎(シヤウジン)
がらまてゆかし海さへ

まゝ文乃　女三宮之薫乃孝心(カウシン)なるに。
名心あるさ海紙も母文よりかんを生れ
とし給へつま
左乃大いとのよ　夕霧之
いとしも泣心よいらぬ　夕霧自文乃書
ばまさ給はさるをいくと侍給之
和尚と人　中君之
こゝろひるんも　今日右日なるへし月の大
宮乃判官元良親王の　大宮乃月
さに宿りし入相を雲乃よりてりしも
ゐる君ゆとゝ云るをお引かへるゆゑ

文の中く　門よりまくりは六条院へ行
給へきの所にて
所文とあて　中美へ文を集らせ給へつま
所へつまいりあらまん　中美の無るすいり
あり渡る屋こん先ニ二条院へ渡つま給へつま
中将の君いら　以中将之大君の月さへ屋ど
かの三の所に後之
いさいとこ　白の河
世の紙にひとゝめあるる　八文の子
さりまとこまこは時く　此後は後果給ふ
屋さりてたまを精ど思へうのつらさ

たゞ屋るかくこもなしとこ
さらはなきに横山の　慈めがくに此にまつま
月まごばかりくりしかんるもとだ横山の月之
志ゐの君には　後推う中はをとりたる之
山里の　白文の打横給へかをこいま
さしかくわを精は　昔の山風のあらら
しをこゝまこるりやとこのを尺しこる之
月こうは　小町の集。中後ゐる男の無ひ
てかくまこちくこうに。月の中と家なるを
月横て称んしうらに打しかれとてさとの
とに称かれは男いむなるものをとこさらぬ

さ海まく

「独つま孫の俺し身付はねさかつて月の
めかまことといふそうはつつ此の乃ふんぞ人はか
くや姫の和源よもぐや姫月の折りしろ
う出たるをそ清ほよりも和ひたるさ
海へ渡人の月のかほうるはいむるをせいし
ふれたぞもさまとひとさまも月渡ん
てをいしくなるさ給もあつま

樂天贈内詩莫對月明思往事損君顔色
減君年

此作事よ　白文乃作るす

ゆうしくたひ　大君もうく不食し給
ゆつましとと　白文乃作るすへ
この作るよ　萬る地へ
人よをいかせし　六君乃作さ海へ
絢つきゆたん　六君へ波物の文へ
作ふ　白文乃作ふよ中君よあまつく
天作ふ
ともとん
いそ北渡り給　中君乃作まへ渡り給へ
孫くさ乃　中君へ
おもうしまや　水飛しさをさぐらい

さん為はの給ふ詞ならるへし

なとうく　旬文の詞

かゝかくはも　うく笑めならるまをも法

の給ふ和歌とも

中君のたゆや

ゆきさらんも　旬文の詞さりやうに云なり

いとうくしう

し給へとも下にたゆのあるんぞんくうやう

なるとも為ぐくなくしあまこの祈まうぐも

なしとあるをぐくさりやうなまことの給

為つま

なれゆくさくゆうし身まの　六君

命まりけるも　返せ上に歌ら給しうとも

ちやけ世乃歌ちくあぐふやうしなまこの返

せをとう歌むへまことも

「ありすてぬいのち待さの程ならうさ

るすまきくたりまとも」

日記も　中君の心

家物る　旬の詞や

和乃まのたゆりまこう　中君の為なる

ふまはあらまや　旬の詞

よしわう所身は　中君の身の上になし

てもなしさらるを給へとも此中文のまら

まくやしさしらめ給へハ男をんなとも世さうとし
おふ屋ゝ物る世　まゝ文ゝ申も上給ハらとし
命乃こしう
見えそ志らぬ今ハ月ハよ命あらハ君やうち
さるゝ人やとゝぬと
うしこれそさつ物　六君よりの返るゝ
あさ乃うゝめつらし貴　玉藻乃うゝ祿を
云つま
いけ乃程ハ　自文ゝ中ハ乃程ハ文を書
てさいらせ給ひ津ゝんとし
さしくゝハ　さしよりこうら津ま乃ハ

ゆくさしら乃　蔵人乃文やハ六君ハ書
子ゝし給ふ
さうしらハ　文乃羽
をゝまるへし　いうにをさけるとハ蔵人文
乃六君をゝ給へかゝ
うとう津しを　白乃羽ハ此ゝ文をかうら
ゞ後まるゝのとし
ハやまくて志りし　文ゝ人まくてあらま
しあをとし
人もハ此ゝ　中君乃ことゝ文とハ云界
よりハ志りさるゝ

ものくしくうしはさ　中君之
こゝのうちの心　中君の心之
おおもりし身　中君や
ひくらしまゝなるゝ　なるへは日はくれぬと
おへはれ山のうきよはてあつまけつの心之
おかくさは　むらしの山里のまくなるまゝ
しらは大まゝのこゝ　ゆへ身物をとし
おしめよら　白文花は持くしの心をさと
なるとし
命こしかれそこ　女も婦君もまさせまゝ
さらぬなつま

又いとつこふく　懐姫はそうせなは花ふ
かくなる事しとし
きさいの文　ゆゑ中文の事ゆゑ
ひ給ひし二日目の事之
おとゝは　女房之
こよひの身しさ　三ヶ夜之
ひ君も　草之ひ君ハ草ゆゑとの給
ひしこ思うちの人なるは旬は定めまゝ給へる
をは構ふ心の事ゆゑ身之ぞ文うんさて物語の作
ちの心を通りて書之
よひすこしすくるし

へ渡して君をひ給ひ給ひしと稱りは浦厩（ムヤ）
乃舎人（ト子リ）之
まにかく　草の子地之
中納言殿乃浦せん乃おうに　如浪乃桃（ハイ）渚（カイ）
は書つま
君をへ入て外給ひて　葦之三条之より
物り給へつま
まにまれまくも　葦も女をもらさう
もしは自文はよう　まほらめとし
文はまほらんと　自文と君身とのひと
しきを云之

ふるめさゝる　早作しさる之
うち乃浦氣之　女二文乃浦る之
こ君は　宮浪の大君之
あせちの君　女三乃文はさふら姫人之
うち渡し　按察（アセチ）乃君の家之人目をもて
かる屋うは秋深くいそ死給ふるをゆる
しる死とは讀ゆまぐくもぐうまぐ給ふへさ
るはてなくなりしとし君身数なるぬれお
るへしとしうち渡しはをしまへくなくさ
なるとしんしぜきは河は葦坂（アラサカ）乃黒の小河（ヲガハ）を
うくいへつまがんるまさ　そめかんとはりんるまさ

なかえの別によせたり
ふたらす　薫乃云之
ふしとの給へん　云のを理りて草子地の
書之
漢とはこ乃そら　薫乃朝之
ことはおしきるすの　薫乃るすを云り
あかかちは世をそむき給へかかる　薫家
あれがちは女二宮乃御事は何云さらう人
しくを云ふ
宮は女二宮　旬宮はしめて六宮をこの也
さい乃御かた　中宮之

こ乃ミやし　そしとは殺之こ乃ミるつし
あるなうするんに花鳥説筋（カン）（リヤク）とは
ほめ
三条殿はらう　雲井鶴乃るす
うらんとさる　中宮乃心之不（フ）如（セウ）月乃とし
一日乃御るすを　文乃朝八宮乃中二年の
御るす薫乃いうしくし給ひしるすに
さりぬへくは　御ぞもあらはちよりまく
こげからゆしく死とし
宮乃いうしく　薫乃心之旬を六宮はし
ひつき給へかかはるへし

うきを給はらぬ　　薫乃返るゝ
一日ゑひしつま　　文乃作意日のうすなとも
撫よゆしとゝ
さゝひ給ふる　　此佛ゐすを作法さるよし
ゆきさが中君宮作へ給ふへきよしの
給ふへきことそ思ひたるとゝ　前に宮作へ
後つま給ふへ身ゐ（アラマシ）ほどの給ひし事
よとゝ
おこりとの給はせ　　前乃文に作品の名称
なからゆかしかりとあつま
アるなでめ　　よの作品のうまがり扇なる

重し
あやしかるまし　　宮作にて乃ゐす
さてあらまりを　　草子地なり
うらめし身人乃　　自をくらぶ重ねとゝ
まさとめしと給らさりし　　薫乃朝へさら
めへくはこれからりと　　女乃朝にあら作る
るゝ　ぞぎとめしにまてあらざるとゝへつま
文海らせ　　此日にて自文海らせ給へつまと
此メしとゝ
拾いとまつしう　　中君乃心
一日うまつしく　　中君乃朝へ

いくしきそこそ　簷中乃奥深きとこ
いとゝおくも　葦乃羽雉は奥深なるとこ
文乃浜ゑ　白乃六羽はしひ猶りまゝ
ゐゑ世やかうき　私からなるとこ
「世やは夏人やは清らさ塗乃ゐる藻は程
虫乃私からそ其
山里は　葦へ中絹へ事
そ是りしも　葦乃羽文乃ゆるし絹そ
かとこ
物はもうるや　葦乃心中はしれはもちなれ
もあまさ　女は言の心出来ぬるこ

さらはこちも　中羽乃羽こ
さてもいのかるま　引とめん乃心はそうく乃
絹へ事
志りし入さして　中羽こ九月はとこ
あらまや思ひてはよかるへし　前乃中羽
乃羽は言浜へ乃事をゐぶと思ひてこ
そよからめ得うよ乃ゆるしなどことく
志くとの絹ひし羽を云事
志ひ乃浜うるりまる　中羽乃羽こ
色みし人乃　大羽こ
中くむまれ　中羽乃心こ

かやうのさちは　菓子地の
かひなれ物から　薫の宮法なるさ海の
こしのたるし　懐姫の君（チヤクタイ）の
いさつらは　昔もかやうの事はありし
とこ
うをぬさいらぬ　返るの
さはらんふりまに　菓子地の
なにかは　中君自笑を振給はさるの
いとく哀は　自笑の作んの
かのはちは　薫は罷給の
おとまぬ　六君の作りこの

かくのことよさ　男はいづまも無（ベン）説（ゼツ）
ある物とたひ給ふの
あかりちなる　薫の
けゆくさき　たりへつまたへも薫よりまは
自笑の行来ことに　ひとしくとこえ
ひさしくとこえ　自笑のと後のるの
男は亜取なさ　中君のんの
たひ歩ゆる　東笑にもたひ給はれて
たゞ名なともあるへ貴なりとの
まれしうさ死は
人なりはなしうさ死はわきに持なめはまし

なる紀をしも何ゝ軟まんぞ事ようちんに忘れ
ぬなどしたさはなきあらさるへしかやう
其ハ此中にて以能にかゝる事なるとこ
又此ハ心をさ給　いくばくの和がきとりも
あらさる物をとなら
見るまゝ物る　かゞりまとは稜音(ウツリガ)ばかりまと
とこゝ心ゝ事も又大概に云なし給へつま
かゝまゝ物そうし　かやう乃所に薫も心をかく
無きとこ
さりうまかゝやく
ふとこ

六君乃此事の目うつし

君はなよくかれる
うたてなよらかなる
何るもいとうるはしく
六君乃ゐる之自
六君乃此志よりしくべ給はなしづる紀とこ
こまをなしかから
兄弟などなきぬ人は
必をづきよりまおがしぬぐにまてあるまし
貴中君乃此さ波奴とこ
かの人の　薫こ
六君乃此事こ
六君乃此事こ
さはいへとえ打ほしまとくさめつま　かく
稱さくて薫乃心ゝしにへと中君を接給

君とは中君こなよく

はさるるさくうつ捨し歯ゝとこ
人くのをりひ　中君の御事にさふらぬ人
をたひ居り給ふ
ゐるむ月のおうし　九月にて無月（サイゲツ）なれは
法事ある人し
こゝりしの御まこう　中君の御料ゝ
むきひをる　撫の常なるをこゝのふるゝ
文にはは契深くおりしましけるゝすとなり
君分にはうらむへ歯るすもなしとゝ
おほさ人のこゝめなきは　自文は中君を
ま一御とたるにはよりまてこゝろ見給ふ

ぐり見給へとゝ
いそやなと　不思ひよのこゝめのとなどは
中おもとゝ
ひ法ゝ世にひ歯ゐる御ある様　六君の
御事ゝ
今そ又　前にはこれあへぬ物とも有様は
今ゝ又様文にたゝくさしいらせ給へ
あやのまこう　綾（アヤ）を織（ヲル）ぬきき料ゝ
この君　薫ゝ
いとおしの人なりしやとて　弟の子地ゝ
よくたひたらせ給ふすとゝ

まにあらうこ紀　　かねの山之
いはまをまつるまし　　葦の朝之
を浴ゆらまとしたひゆゑんとく　　大君はよん
がけそめしるすたまるを
うし浴めさく　　中君の朝あるくよりこ
そ申鶯うまとるすもまつまとと
さやうする　　葦の朝中君のまゆるを
葦は浴り給へと以おのあるしるすをうし
こ紀るすはのくまふとと
からうして　　そまさ山里へ乃活用によう
の給ひつまとと

そ拂ゑをふ　　それをもこましくを
たひしとと
山乃うく　　庭乃山するへし
跟りあにある
紀しさ乃跟りこふあ消せるせかつら
角をたゐくるまをうさしゆし
をとるし乃里　　宮跟乃山里は鶯（コモリ）てをと
安とと
紀給ぬ祢をこにまん色立て以て城んを遠の里
う乃山里　　宮跟之
昔おほゆう人うく　　大君乃るすん

さるへ貴ゆへおましまし　　葉の詞
いさや　中君詞
おもひ物なきさ波　　大君をおかせざとおも
もろ君なるまて中君の君の独(ヒトリ)のよ
ゆとし
又おひなる君　　君の力さへあるに又おひなるき
るまをそへくとし
の給ましおくるに　　葉の推し給へ
文の思ひて　　古八文
思ふくさ　　落胤(ラクイン)服(バラ)なりとおもへしとし
むさしひなくうくこの事におかりせし

仰に志のふの草をはやくし
かりまして八形にしくは　　葉の詞
ゆつ日んと　　中君の詞
世をうこかに　　蓮(ホウ)菜(ライ)山(サン)を云つて楊(ヤウ)夫人(キヒ)妃
の事し
いさやいかしへの　　中君の詞八文の作子也
うぢゆへ給はざるましとや
母なる人　　手ゐる君の母をて中君のいと
こなり
佛になるん　　山里の本(ホ)尊(ゾン)と云ふ詞なり
付くの給へ

さるまきなくて　薫乃御之中ニ君乃君方
をいひのぐまんゑめとは推し給ふ
うらゑゆめて　腕乞(イトゴヒ)せざして入給へるを
おりこちて　意好なとよりて薫はさの
ミ絲(レン)せざるとおり
人乃おいまも　私ニ君ふまかれはぬ聞うま
ありてはとなるま
いとゝむりし　大君乃事ニ
いとうしこきまことと　弁のさ御之
いかになるめ　薫乃御之
人乃うへまて　弁の御大君旬文乃御とぞ

えぬ歌給ひし出はまてあるましとこ人
乃上まてさへかく深く物ニ思ひを志給へるに
心なまじ薫に給りなびさ給はざる
もかやうの事を通乃ありなるへしとこ
きにの乃なまうせ　中ニ君ニ今六ニ君ニ物
ニひをし給へりよしを御ゆきは理と思
合ふるとこ
とある事もかゝ給ふも　薫乃御や君
方媒(ナカダチ)せしるまきは一入おしきとこ
出はの　旬文乃事ニ
いひてもく　雑務乃御之雅もくとこ

らぬせとなり

泥き日　大君乃一廻（クイキ）君之牙三年と云義

不用之

昔乃人れ　八宮之葉乃心之

とまり給りん人を　古宮も能君を見れまし

ますす有まこしう寺なとまたまたへきらす

をたひまづしひ給ひはしめとし

兵ゆ宮乃和事　中君之

ことさ海まも　此度をさし寺ありなして

別に殿をさしへ牙とや

とさ海かうさ海　あざり乃無答之一宮とし

かまち孫をつくして　河海に見えしあり宮

乃心ゑ葉乃雑（ヨシウ）習を持て佛名をし海

入し給へとし

あはくし牙　追くし不宮給るすとし

とうくの給ひ　葉乃宮め給ふし

此度計　葉乃心之寝殿をこぼつ蜀を

きまれし

志んてんかへつまて　弁に葉の給ふ須之

京乃宮　中君乃まし

有檀大納言　掘木之

めつらしく　葉乃誕生乃事之

りの泊せは　今葉乃あくらちくなる様
侍るハ梅木によく交ほかへしまりし
陰(イン)德(トク)陽(ヤウ)報(ホウ)なるへしとなり
交よりまも　中交之
とめくしく　巨や
交乃泊まハ　中葉乃事之
心ゆるさくらん人乃　うと紀人なとくりハ
まくくしきあへしらひ給ふへ身心なる
まと和つま
家はハ　葉はなきをくしく面なく
見えて屋こゝあへ身屋こゝふし給へつま兄弟

若心紙紅合てしくらべ給ふ之
かくしき給乃るす　中葉乃かゝ乃にかくら
給ひしるす之浮身乃るす之
家はしまろ　無ヶ絹
さもやと　朱八交なく君泊子とハ心百なる
がらん之
椒ひひくちは　狗なく陰奥ゆる之しが今
ひくちはなりてくゞまつる之
くりしく　葉乃心之
まくこ君はこれのまゝ　家屋なき書つま浮ゝ身
乃母　中狗君　八弁がいとこめいと

夜いふり　浮舟の事の女房之
うの浜ちかに　八宮の浜墓(ハカ)之
今さらはさやの浜ゐまくは　さやうの浜
ゐぐくなり
秋風をくまこくりてさいまこる　葉かりを
くれさるゝ
とかくしの　京氣ゐぐひなし
こゝはなと　蔦(ツタ)の數之云く
風さり風と　昔の名所をしりどくさ
びしかるへきさと思して葉かく一生をより
安なくしれ給ふる東坡(トウバ)君(ガ)生如寄(キ)耳(ジ)と(ニヤドリキー)

云れぬくいづくしも云さるとと
あまこちのかな　あまこゐるうぎ紙何ともしる
ちで一秋をもぬし給へかかる謀は不淺
昔をしひ給へかかれと哀なるとなり
男文　折節白文もおりしまれ所かな
南の文よりも　三条文紙云りまゐりも
小の浜よりゐらんよと云りまゐ二条浜の南
なまこちも
日はなにる　女の親之
花の名男　屋の名所尽しまゐ名男時
ものこわりひ浮きせぬよの中のうき

いとくのみ子西回し於まくさへ晴(ハレ)ぐ
しとなり
よくも待ましなく　白乃朝
をとこしハまたにさやめりけらん　兼子龍之
無りこと　白乃そくのしけふ之白文を
見ふまゝしきとなり
山里乃　無るすの朝之
さやうまく　堂(ダウ)まなしてよかるへしと之
ことさらに又若ほ乃なり　前乃山紙りと
めんよりまゝしこしとさらの朝妙之何時
も入無きの心あるを

いかならん巖(イホ)乃中にまとゝ海だりハ世乃う
身るすの中えこざらん
を落れ形れ　をろかならぬとうまし
かるへしとなり
かくにくなきしきも　白文乃心之
地よりことに　しと兼に海ぎまし尾(ヲ)
花乃をぐまとうるさ海之
ゆくて露　小花乃さ海ゆ之
かに出ぬ　薫乃折くかやうし乃文かよ
いしのめまじばさくさにまゝ志心乃ゆりし海を之
身と白乃推しけふ之志のぎくさ一種

数別にあらと云説あり但種(ホ)にしぬ
なかちんを云歟志乃もとく秀種に出るとよ
めるを字多くし然ハ種に出ざる数別なり
と云説非歟

なつし歟　自文乃法さ海之
ちいさ紀法末丁　中君之懐姫乃時多之
あきさちのかな　中君さて自文乃心乃うハ
なかはりとり成給へる
家分ひとの乃　大君乃まうこひとつのう
歟うらうしなるへくの世紙もうらこ
はるれ

かゝ数にしたるへる　薫乃事之
うのひたてゝ　菊乃さうまなるを云
まゝ稱ふからに女のさきまゝだのに尾花
乃時なりけへり
花乃なるにひとへに　不(ス)元花中(カニ)侮(ヘニ)菊(スルニアラヲ)
此花罪(ケチ)侮(ケチ)文(ニ)菊(ケヾ)花
なにしの君之　西文乃左府(フ)乃事や
親王なるに稱とも孫にとりてくいへなる
歟末代かりて奇(キ)瑞(ズイ)などもなりけれは曲
もなきなるなり
法ことも　琵琶なるを

くらおしと　中君之
心にくわさく　中君乃朝面白朝之当付
しくに淺くとも偽(ツタヘ)なる取えてあさうらべ
かくばしとも君方にくちを給ひてくちまとと
なるまで猿道如此之
昔しく　中君乃朝右(ユ)文乃作るまを云つま
かなくるまの　自の朝之
此はうる後つま　六君之
そ中納云　葉之花鳥乃花實如何
うの君　葉よりてくしはふまじきと
なくば朝にして葉とは結みしあり

ゆるひさりを結ハ　琵琶ハ上に黄鐘(ワウシキデウ)調
乃うき合と行り
伊勢乃うミ　自文僧(サイ)る(ラ)系をうたひ出
しはらと
又海らる海おしまに　宇治へ海り給へ
身心乃あるを
うのとのまえ　六君乃作まや
しとなる海るまるき　夕霧乃朝之此流と
そ二条院之六条流乃作後久安ミざうと
なるま
作ミ河からも　中君之

まちかねて年もくまれ　二年はまたに
て萬ぬるを
正月の御こりを　葉廿五日の朝之は蔵書
の年ゐて次の年は移(ウツ)ゐ之中ゐ
延生遊ばく都之去年五月より懐姫や
ことせに　毎ひそめ給ひしよりを二年
になる所り
ひと和　旬の御志だらるまとを
さるは女二宮　葉より給へ貴とて御振(フリ)を
まちぬまはれ御裳(モ)着(ギ)の事を急給へり
御くも和　初の御ぎりなとまるを

まちらとも　宮ちは御付さる之物(テ)延(ヘ)
の事御事も一事にて御給事をだ。
宮ゝの事は御くいとなませらるゝ御
法なり
御そその程は　葉より給へとを
まいの事なまは　葉の心のくせなまは之
なれしおとう　除目(ヂモク)の後執筆(シユヒツ)中行(ヲコナウ)事
やゝ次は任(ニン)友(クハン)あるゝ之遊代久安後
あるりや
右大いとのたりて　紅梅なるへし行御書
の羅(ショウ)(ジン)をはかんとうぷ物語源氏の大将

ゑ心たとへしら

いとらしく　　中宗之

おりそこ乃あきハ　　花鳥よみしら

はつさ乃人

まいつれを振情さる事之。観主云堪(エン)　　大将書まかし中小将笠

下(カ)乃春とて清俵めて之

をとる急くしも　　中宗もも　八丈乃清女(ムスメ)なれ

おしろ宗りよさ乃こをともゆへ思るすりも

兆をとしく

あらおかうら　　産(サン)穢(エ)なる猿なる之

みて乃せよ　　碁(ゴ)石乃うまき也之
碁手錢也産ノ一殿ニ如此
此遊ノ雑具なる云なり之

今さく

諸(テン)神(ジン)之首と云の何もたち之鑼(コン)鈍(ジ)

ともいへりまうじんとゝ云わ乃あれや

家乃あゆふ　　中之大吏之

大ひとの　　夕さきら之

昨ニひるしも　　中宗之草まる純之

昨しと乃昨むこ　　花鳥りよみしら

夜乃おとしも　　夕さきら之

かれ乃ちて家をせん　　女三家之

まと道かりして　　藤堂家乃事之

大らしや　　二家乃母書乃もちづ之

心のうらまか　　叢乃人之

さらてさせ　薫の私へいまさせまほしんとこ
まゝ文は　女三の文
はゝ文　女三の文へ乃勅書之
心の内ハ　薫の心之
心ましりや　薫の事さ波之罪をなせ
もあり又浜門の浜聟(ムコ)なる事之
今はさりとも　中君の心之
心よもあらぬ　薫の朝之
いとあさましき事　中君の朝之
おはせましかは　大君の事之
打とをまちてる　中君の君分匂ひかし

打ゑ(トケ)く後悔の心の御ともまゐばとく
見侍るとなり
さらなるなるまゐまゐは　若君の乳母の
出しゆるゝ一浜しぬぐひなきなるまれは
世のおひまゐまゐくく　君の心を發(ヨコシ)がて
しとなり
いふかひなく　大君之
打もさくし事　六君の浜後よとうて
おはさるとこ
かくめくしく　惠清草まる地之めくし
くは女くしくこ浜門も浜らんしこめたる

取こうめるらめとるり
くまこめれも　二ゝ文へ系り給へまこりを
夜はなるらは　夜臺より角(ハウガク)のいこめ也
夜の花の裏　花鳥の記(セイキウキ)を引つる
花の花とく　右中右とめつる花鳥天
暦二年右大臣上首こりとこゝされど
そこゝ花なるへし夕雪の事也
夜中観云　鬢黒の大臣の息右兵衛
獨も同児中也
三文　旬文也
文の御事より　二ゝ文やや

入道の文　女二ゝ文也
きんのふ　琴の譜(フ)也
美は御ゝへし　柳木の葉也
志ゆかしの屋ゝさ　やうきは盤(バン)のるゝ
まへ物なり
花とゝ志さりてゝ　天盃(ハイ)を無安り
上そこゝ御さりまこり絵を親王の中には
珍しぎなるしとて大将はゆづり給へる
をしとの給へる　不分ぬるゝ
さしかへし　盃の凝濁(ギヨウダク)をこけして天
盃をは懐中(クイチウ)するゝ別盃(ベツハイ)を持(サン)へし

とふ之
かさりおほきこれ　位次第之　朱　筆之
あせちの大納言　雅ともすくなく紅
梅乃おとゝなるへし。大臣とも書けるし
さるゆへにしかくかきなしけるにや
はゝ君の后の母女御　藤壺女御　女二ノ宮母　よ梅
按察乃大納言乃むすめけしたまふなり
ふるきいの　草子の詞之
かくゐのまち　とらへの和なるへし
かうさし　ふくの洞かざしとおもひて之
まへうこの　後の蔵はゞ女二ノ宮を玉ふ也

うきかうさる　家おもよきてゐるとた
よ後乃代を　洞製之　御楽方とまするへくれ
ともたん今日もおはさるとた
朱　藤の花殿の御わむしさ紀の宴とのと
それやゝなるれぬる
是うるあ　夕霧乃とのなるへし
あせらも　紅梅なるへし
おうつさちへ　還御之
玄乃洞の手
こう心中　二之兄之
かの　車乃飾の金物をいへる
葉よりの洞むらひをいへる

はせりてこそ　薫のあまりあるらん
さそはましいのくらま　花よ先くさみよふき
かやくとし
あさいや　領納(リヤウナウ)志てるへくにあるのこゝろ也へ
水おりて　こゝろくはいへんもあるしとく
はれんてんこそ　新造(シンザウ)あるまじけれ
波その上の枝は　下のかきのこゝてめづらしへ
みなへし
ともよもおちて
流せんのさ波　ともりよめる人こそ京なれ
ざるさ波

あさひ出しみか
くるましわたるく　大寒りよ御かり
うら板といふあさを志てさて　女車は車の前板(イタ)ゟ
家もりして比用をこそよせてるへし
さもくるしきに　人くのいひし
あけまし紙志へせん　東宮の方をさしてあ菊
紙の色さとしてあさき紀とや
くひある紙　ひさしのぜんしゞむさと紀ん
ありく衣鑑くこそあるしとし
りのまゝ絵かける　あ水あし
かめ浦るまじるく　花はよいはめのいざん

明宿木卷四十九

四十三終